

本邦全結核および臓器別結核死亡率性比の研究

東京女子医科大学衛生学教室 (主任 吉岡博人教授)

明 石 み 代

(受 付 昭 和 35 年 8 月 1 日)

緒 言

結核死亡に関する諸般の問題について数多くの研究があるが、男女間の性比についての報告は少ない。男子と女子では生物学的に本質的な差がある^{1)~9)}のみならず、社会生活環境もことなり、結核症の感染、発病、病態進展等にも大きな相異がある。したがって結核症の疫学研究に、性比は重要であると考えられる。つぎに結核症の発症臓器別によつても、生物学的に本質的差異の認められる男女間には、当然相異があるものと思われる。しかるにこの問題に関しての報告は少なく、諸岡・藤屋¹⁴⁾が各臓器別結核について性別年齢別死亡率を観察しているにすぎない。

また結核症は近年各種の新治療薬剤の出現、外科的療法の進歩および環境衛生の改善によつて死亡率は激減したが、生物学的に本質的差異の認められる男女間に、これらの因子はいかに影響したかを検討することが必要と思われる。

著者は本邦における結核死亡の性比に関して、全結核死亡率および各臓器別結核死亡率における年次的推移を追求観察し、若干の知見を得たので報告する。

資料および研究方法

資 料:

明治32~38年 日本帝国人口動態統計
明治39年~昭和13年 日本帝国死因統計
昭和14~18, 22~30年 人口動態統計
明治31 (明治32年の人口として使用), 36, 41年, 大正2年 日本帝国人口動態統計
大正9, 14, 昭和5, 10, 15, 22, 25, 30年 国勢調査報告

静態統計調査間、国勢調査間の人口は各年人口動態統計の末尾に所載の旧内閣統計局の推計人口を使用した。臓器別結核の死因分類は、さきの諸岡の報告¹⁴⁾に準じた。

研究方法:

明治32年より昭和30年にいたる57年間の、全年齢層を含む「全結核」および「臓器別結核」の死亡率を性別に求め、ついでこれの性比を算出し、両者の年次的推移を観察した。

死亡率性比 = (男子死亡率/女子死亡率) × 100

臓器の分類は、1. 呼吸器系の結核 2. 腸および腹膜の結核 3. 中枢神経系の結核の3種に分類¹⁴⁾した。

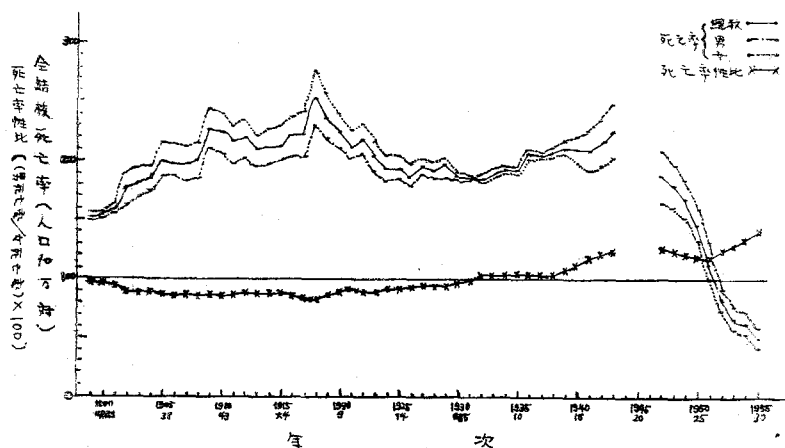
研究の結果

I. 性別「全結核」死亡率および死亡率性比
(第1図, 末尾の付表)

人口10万対の死亡率(以下同様)は、明治32年に男150.8, 女154.1で女子が男子よりわずかに高い。以後男女ともに逐年上昇し、明治38年に男187.7, 女216.1となり特に女子の上昇が急である。明治42年には更に死亡率上昇して男210.9, 女245.0を示して第1峯をえがく。大正7年には第1次世界大戦後インフルエンザの流行に応じて、男229.5, 女277.2の異常な高率を示し急峻な第2峯をなす。その後男女ともに下降するが、常に女子死亡率が男子死亡率より高い。昭和7年に男182.2, 女177.1で明治以来はじめて男子が女子よりも高く、以後男子は女子より低くなることはない。昭和7年を谷として再び死亡率は上昇し、昭和18年には男248.8, 女202.9で第3峯をえがき男子の上昇が特に著しい。男子は第3峯が最高を示し、女子は第2峯が最高を示す。戦後は男女ともに逐年急下降し特に女子の下降が著明で、昭和30年に男57.7, 女41.2となる。

性比は明治32年に97.9で以後逐年下降し、明治35年より大正12年までは80代で経過する。大正13年に上昇して90をこえ、さらに上昇しつづけて昭和7年に明治以降はじめて100の線をこえる。以後は死亡率の上昇とともに性比も上昇して昭和17年に120をこえる。戦後は死亡率下降に逆行して性比は逐年上昇して、昭和30年に全期間中の最高値140を示す。戦後著明に性比が上昇するのは、死亡率下降特に女子死亡率下降が著明なためである。

Miyo AKASI (Department of Hygiene, Tokyo Women's Medical College): Studies on the sex-ratio of mortality from tuberculosis of all forms and organ-specific forms in Japan.



第1図 「全結核」性別死亡率および死亡率性比(全年令)

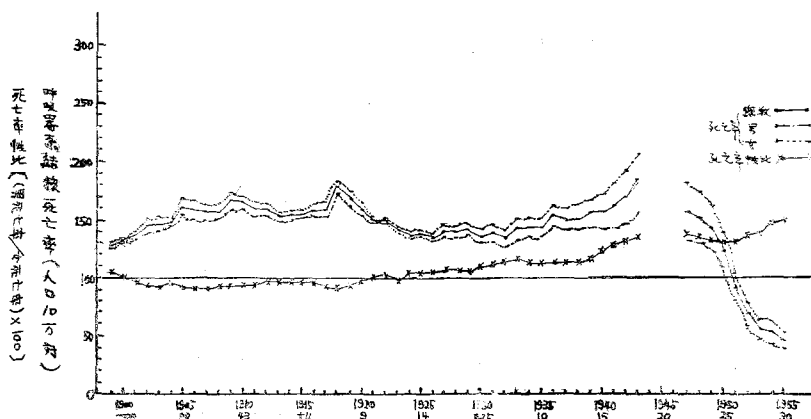
II. 性別「臓器別結核」死亡率および死亡率性比

1. 性別「呼吸器系の結核」死亡率および死亡率性比(第2図, 末尾の付表)

死亡率は明治32年に男129.0, 女126.3でわずかに男子が高い。以後逐年男女ともに上昇するが, 特に女子の上昇が急で明治34年以降は女子が男子より高い。明治38年に男女ともに第1峯をえがき, 明治42年に男161.9, 女172.7を示して第2峯をつくる。これは前出の全結核死亡率における第1峯に相当する。大正7年に男172.0, 女188.3で今次大戦前における最高峯である第3峯をつ

子死亡率の最高峯をつくり, 女子は大正7年に最高峯をゆずるが, 男女ともに第4峯を示す。すなわち「全結核」死亡率とその経過を同じくする。戦後は男女ともに逐年死亡率急下降し特に女子の下降が著明で, 昭和30年に男53.3, 女36.3で全期間中の最低値を示す。明治年代より大正9年までは女子死亡率が男子死亡率より高く, 大正10年以後は男子死亡率が女子死亡率よりも高い。

性比は明治32年に102.1で, 以後逐年下降して明治34年に100を割り, 明治39年に全期間中の最低値90.4を示す。以後大正9年までは90代で経過し, 大正10年に上昇



第2図 「呼吸器系の結核」性別死亡率および死亡率性比(全年令)

くる。これは全結核死亡等における急峻な第2峯に相当し, インフルエンザの流行が特に「呼吸器系の結核」におよぼした影響大なることを示し, 呼吸器結核が全結核中に占める比率の大なることを現わしたものにほかならぬ。その後男女ともに下降, 特に女子の下降が大きく, 昭和10年以降には男子より低くなる。大正13年より昭和7年まではほとんど昇降はないが, その後は再び男女とも上昇の一途をたどること「全結核」死亡率に同じである。昭和18年に男205.1, 女154.5で57年間を通じての男

して100の線をこえ, 死亡率の動揺せざる時も性比は上昇して昭和6年に110をこえる。以後は死亡率とともに上昇して昭和17年に130をこえる。戦後は死亡率下降に逆行して昭和22年まで上昇し, 同26年まで一時停滞するが, 同27年年以上昇しつつけて, 昭和30年に全期間中の最高値146.8を示す。戦後著明に性比が上昇するのは, 前出「全結核」と同じく, 死亡率下降特に女子死亡率下降が著明なためである。

2. 性別「腸および腹膜の結核」死亡率および死亡率

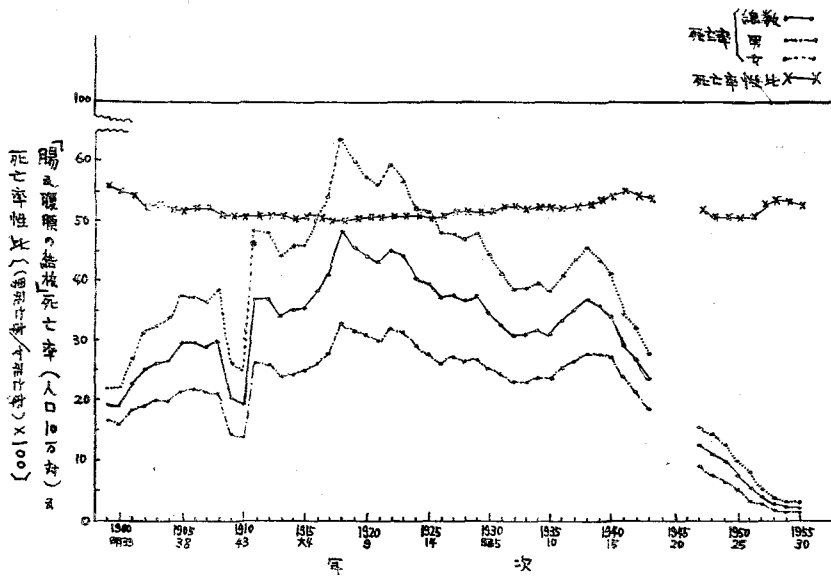
性比 (第3図, 末尾の付表)

死亡率は明治32年に男16.6, 女21.9で女子は男子の1.3倍強高い。以後男女ともに逐年上昇し, 特に女子は急上昇して, 明治38年に第1峯を示し, 前出「呼吸器系結核」の第1峯に相当する。明治42, 43年は亡死数がその前後とちがつて異常に少なく, 従つて死亡率も異常に低くなる。この理由はわからぬが, 明治42年における死因分類方式変更のためと推測されるから, 死亡率曲線より省くのがよいと思われるが, 性比の算定には差支えないと思ひ記載した。大正7年には男33.0, 女63.9を示して男女ともに57年間を通じての最高峯である急峻な第2峯をつくり, 前出「全結核」の第2峯, 「呼吸器系の結核」の第3峯に同調する。ついで多少の起伏はあるが, 昭和7年まで漸次下降して後は上昇して, 昭和13年に男28.1, 女45.6を示して第3峯をつくるが, これは前出「全結核」および「呼吸器系の結核」より5年前に峯が移動している。昭和15年には男女ともにすでに下降

核」が, 他の結核に比して特異な点は, 終始一貫して女子死亡が多く性比は低いこと, および死亡率の変動にも左右されず性比50~60代を保つことである。これは各種の社会的条件の影響より生物学的条件の影響, すなわち性による差が優先するものと思われる。

3. 性別「中枢神経系の結核」死亡率および死亡率性比 (第4図, 末尾の付表)

死亡率は明治32年に男女ともに6.3で, 以後男女ともに逐年上昇して明治42年に男12.7, 女13.2を示して緩やかな第1峯をつくり, その後緩徐な起伏をつづけて大正7年の男12.9, 女13.3の第2峯にいたる。この山は大正11年までつづき, 大正12年に下降して男女ともに10を割り, 昭和5年まで下降して後は逐年上昇して, 昭和14年に男14.4, 女12.2で第3峯を示す。男子は第3峯が最高を示し, 女子は第2峯が最高を示すが, 昇降はいずれも緩徐である。しかして第3峯が「全結核」および「呼吸器系の結核」よりも4年前に移動している。以後は男女



第3図 「腸および腹膜の結核」性別死亡率および死亡率性比 (全年令)

し, 昭和18年には著明に下降して男18.5, 女28.4を示す。戦後は男女ともに逐年下降して, 昭和30年に全期間中の最低値男1.5, 女2.5を示す。しかして前出「全結核」および「呼吸器系の結核」では死亡率下降は戦後はじまるが, 「腸および腹膜の結核」では死亡率下降はすでに昭和14年にはじまり下降速度が急である。

性比は明治32年に75.8を示すが, 以後死亡率上昇に逆行して逐年下降し, 明治37年に50代に降り, 昭和6年まで50代で経過する。昭和7年に上昇して60をこえるが, 昭和30年にいたるまで50代から60代の間で経過する。

「呼吸器系の結核」の次に多い「腸および腹膜の結

ともに逐年下降するが, 昭和18年に一時上昇する。戦後は昭和22年にすでに男女とも10以下に下降し, 以後逐年急下降して昭和30年に全期間中の最低値男女ともに2.3を示す。「中枢神経系の結核」の死亡率曲線は, 昇降が緩徐でその峯も低く谷も浅いが, 「全結核」死亡率曲線の走行にはほぼ平行した経過をたどる。しかし, その下降開始は全結核より早い。

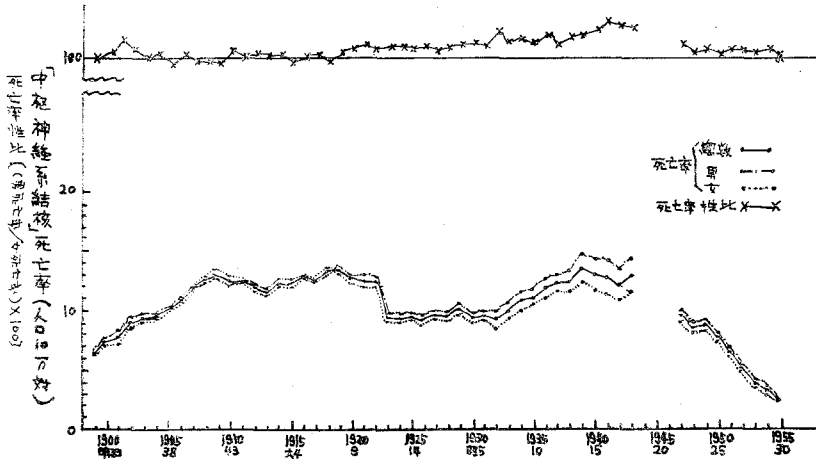
「中枢神経系の結核」は戦後の各種抗生物質出現以前は罹患すれば100%の致命率を示した。しかるに戦後急激な死亡率下降をみたのは, 治療法の進歩により罹患しても治癒したものもあり, また環境衛生の改善とあいまつ

て発病を阻止し得たものが多いことを思わせる。

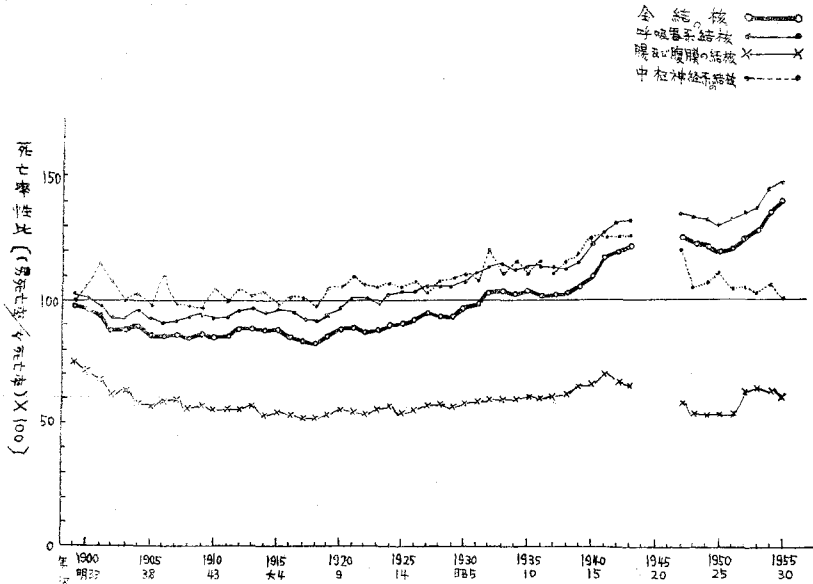
性比は明治より大正年代までは100の線をわずかに上下して経過し、性別による差を見出しがたい。昭和年代に入ると死亡率とともに逐年上昇して、昭和16年に最高値127.3を示す。戦後は死亡率下降とともに性比も下降し、昭和30年に100となる。すなわち昭和初年より同16年までは「全結核」および「呼吸器系の結核」と同傾向

の結核」の性比が最も低い。昭和16年以降はその順位をかえて、「呼吸器系の結核」、「全結核」、「中枢神経系の結核」、「腸および腹膜の結核」の順位になる。

2. 各性比曲線の経過は、昭和15年までは「全結核」性比曲線に平行して経過するが、「中枢神経系の結核」では昭和16年より、「腸および腹膜の結核」では昭和17年より下降しはじめ、以後は「全結核」性比曲線の経過に



第4図 「中枢神経系の結核」性別死亡率および死亡率性比(全年令)



第5図 「全結核」および「臓器別結核」死亡率性比(全年令)

をとって性比上昇し、戦後はこれに反して下降し再び性別による差を見出し難くなる。

III. 「全結核」および各「臓器別結核」死亡率性比の相互比較(第5図)

1. 明治年代より昭和15年までは、「中枢神経系の結核」の性比が最も高く、つぎに「呼吸器系の結核」の性比、3番目に「全結核」の性比があり、「腸および腹膜

反して下降傾向を示す。「呼吸器系の結核」および「全結核」は平行して昭和22年まで上昇し、同23年より25年まで下降するが、以後は逐年上昇傾向を示す。

3. 各性比曲線が100を越えるのは、「中枢神経系の結核」が大正8年で最も早く、ついで「呼吸器系の結核」が大正10年に、「全結核」は遅れて昭和7年である。「腸および腹膜の結核」の性比は終始低く100を越

附表「全結核」および「臓器別結核」

年次	全結核					呼吸器系の結核			
	死亡率(人口10万対)			死亡率 性比	死亡率(人口10万対)				
	総数	男	女		総数	男	女		
1899	明治	32	152.4	150.8	154.1	97.9	127.7	129.0	126.3
1900		33	159.7	157.2	162.3	96.9	134.2	134.7	133.6
1901		34	168.3	163.1	173.6	94.0	138.0	136.5	139.4
1902		35	179.6	168.9	190.4	88.7	145.0	140.2	149.9
1903		36	183.0	171.3	195.0	87.8	146.9	141.4	152.4
1904		37	185.4	174.9	196.0	89.2	148.2	144.8	151.7
1905		38	201.8	187.7	216.1	86.9	161.3	155.4	167.2
1906		39	199.4	183.9	215.3	85.4	158.2	150.3	166.2
1907		40	198.4	183.6	213.4	86.0	156.6	149.6	163.7
1908		41	200.6	185.3	216.2	85.7	156.9	150.6	163.2
1909		42	227.8	210.9	245.0	86.0	167.2	161.9	172.7
1910		43	224.2	207.3	241.2	85.9	165.3	159.3	171.4
1911		44	215.2	198.8	231.9	85.7	158.6	153.2	164.1
1912	大正	1	219.0	203.9	234.4	87.0	158.9	154.4	163.4
1913		2	209.2	195.8	222.8	87.9	153.2	149.9	156.4
1914		3	211.2	196.6	226.0	87.0	153.2	149.6	156.9
1915		4	212.9	199.1	227.0	87.7	154.5	151.2	157.7
1916		5	220.5	203.5	237.7	85.6	158.4	153.6	163.3
1917		6	222.6	203.2	242.3	83.9	158.5	152.4	164.8
1918		7	253.2	229.5	277.2	82.8	180.1	172.0	188.3
1919		8	235.6	216.2	255.6	84.9	167.3	162.0	172.9
1920		9	223.8	208.5	239.3	87.1	157.2	154.8	159.8
1921		10	212.7	200.7	224.6	89.4	147.5	147.8	147.2
1922		11	217.9	204.3	231.4	88.3	149.9	149.9	149.8
1923		12	202.2	189.3	215.2	88.0	140.9	140.3	141.5
1924		13	192.9	183.3	202.7	90.4	135.7	136.9	134.4
1925		14	193.7	184.5	203.1	90.8	137.8	139.9	135.7
1926	昭和	1	186.3	178.7	194.0	92.1	134.0	136.5	131.4
1927		2	194.4	188.7	200.1	94.3	140.7	144.6	136.8
1928		3	192.2	186.4	198.2	94.0	139.5	143.1	135.8
1929		4	195.9	189.6	202.3	93.7	141.7	145.0	138.4
1930		5	185.3	182.2	188.4	96.7	134.8	139.9	129.6
1931		6	187.7	185.9	186.5	99.7	137.7	144.5	130.7
1932		7	179.6	182.1	177.1	102.8	133.1	141.5	124.5
1933		8	188.3	191.0	185.6	102.9	140.5	149.8	131.1
1934		9	192.7	194.7	190.7	102.0	143.4	152.0	134.7
1935		10	190.4	193.2	187.7	102.9	141.9	150.5	133.2
1936		11	206.5	208.6	204.4	102.0	153.8	162.7	144.9
1937		12	203.0	204.5	201.5	101.5	148.6	157.0	140.1
1938		13	206.2	208.3	204.1	102.0	150.0	159.2	140.8
1939		14	212.0	217.5	206.5	105.3	155.3	166.7	143.9
1940		15	209.6	220.6	198.6	111.0	155.3	170.8	139.8
1941		16	208.5	225.3	191.7	117.5	159.3	179.0	139.6
1942		17	215.2	234.9	195.4	120.2	168.4	191.1	145.6
1943		18	225.9	248.8	202.9	122.6	179.9	205.1	154.5
1944		19							
1945		20							
1946		21							
1947		22	187.2	208.9	166.6	125.3	156.2	180.2	133.4
1948		23	179.9	198.7	161.9	122.7	151.3	172.7	130.9
1949		24	168.8	185.7	153.1	121.2	141.3	160.4	123.2
1950		25	146.4	159.6	133.7	119.3	121.8	137.0	107.2
1951		26	110.3	121.0	100.0	121.0	90.8	102.8	79.2
1952		27	82.2	91.2	73.5	124.0	67.2	77.1	57.5
1953		28	66.4	74.5	58.3	127.8	55.1	63.9	46.7
1954		29	62.4	72.0	53.2	135.3	52.6	62.6	43.0
1955		30	49.3	57.7	41.2	140.0	44.6	53.3	36.3

死亡率および死亡率性比{(男死亡率/女死亡率)×100}

死亡率 性比	腸および腹膜の結核				中枢神経系の結核			
	死亡率(人口10万対)			死亡率 性比	死亡率(人口10万対)			死亡率 性比
	総数	男	女		総数	男	女	
102.1	19.2	16.6	21.9	75.8	6.3	6.3	6.3	100.0
100.8	19.0	15.9	22.1	71.9	7.2	7.3	7.0	104.3
97.9	22.8	18.6	27.0	68.9	7.7	8.2	7.1	115.5
93.5	25.3	19.2	31.5	61.0	8.8	9.2	8.5	108.2
92.8	26.2	20.1	32.5	61.8	9.3	9.3	9.3	100.0
95.5	26.8	19.9	33.9	58.7	9.4	9.5	9.3	102.2
92.9	29.7	21.7	37.8	57.4	10.0	9.9	10.1	98.0
90.4	29.9	22.2	37.7	58.9	10.9	11.2	10.5	111.4
91.4	29.1	21.6	36.7	58.9	11.6	11.6	11.7	99.1
92.3	30.1	21.4	38.8	55.2	12.5	12.4	12.6	98.4
93.7	20.7	14.9	26.6	56.0	12.9	12.7	13.2	96.2
92.9	19.5	13.9	25.1	55.4	12.3	12.6	12.0	105.0
93.4	37.3	26.5	48.4	54.8	12.3	12.3	12.3	100.0
94.5	37.0	26.1	48.1	54.3	11.8	12.0	11.5	104.3
95.8	34.2	24.3	44.3	54.9	11.3	11.4	11.2	101.8
95.3	35.0	24.2	46.0	52.6	12.2	12.4	12.0	103.3
95.9	35.5	25.0	46.2	54.1	12.1	11.9	12.3	96.7
94.1	38.2	26.2	50.4	52.0	12.7	12.7	12.7	100.0
92.5	40.9	27.9	54.1	51.6	12.3	12.3	12.2	100.8
91.3	48.3	33.0	63.9	51.6	13.1	12.9	13.3	97.0
93.7	45.5	31.4	59.8	52.5	13.2	13.5	12.9	104.8
96.9	44.2	31.1	57.5	54.1	12.5	12.8	12.2	104.9
100.4	43.1	29.9	56.3	53.1	12.3	12.8	11.7	109.4
100.1	45.8	31.9	59.7	53.4	12.2	12.6	11.8	106.8
99.2	44.1	31.4	56.9	55.2	9.2	9.5	9.0	105.6
101.9	40.6	29.3	51.9	56.5	9.1	9.4	8.8	106.8
103.1	39.5	27.6	51.6	53.5	9.3	9.6	9.1	105.5
103.9	37.2	26.2	48.3	54.2	9.0	9.3	8.6	108.1
105.7	37.6	27.4	48.0	57.1	9.4	9.6	9.3	103.2
105.4	36.8	26.4	47.3	56.9	9.3	9.6	9.0	106.7
104.8	37.5	27.0	48.1	56.1	10.0	10.4	9.6	108.3
107.9	34.9	25.5	44.4	57.4	9.2	9.6	8.7	110.3
110.6	32.7	24.4	41.0	59.5	9.4	9.7	9.0	107.8
113.7	30.9	23.3	38.6	60.4	9.0	9.8	8.2	119.5
114.3	30.9	23.1	38.9	59.1	9.8	10.3	9.3	110.8
112.8	31.7	23.9	38.9	60.5	10.7	11.5	10.0	115.0
113.0	31.0	23.9	38.3	61.4	11.0	11.5	10.4	110.6
112.3	33.6	25.4	41.9	60.6	11.6	12.5	10.7	116.8
112.1	35.0	26.5	43.6	60.8	12.2	12.8	11.5	111.3
113.1	36.9	28.1	45.6	61.6	12.2	13.1	11.3	115.9
115.8	35.9	28.2	43.7	64.5	13.3	14.4	12.2	118.0
122.2	34.1	27.3	40.9	66.7	12.7	14.0	11.4	122.8
128.2	29.3	24.0	34.5	69.6	12.5	14.0	11.0	127.3
131.3	26.8	21.3	32.2	66.1	11.9	13.2	10.6	124.5
132.8	23.5	18.5	28.4	65.1	12.8	14.2	11.3	125.7
135.1	12.4	9.1	15.6	58.3	9.3	9.7	8.9	109.0
131.9	11.2	7.8	14.5	53.8	8.4	8.5	8.2	103.7
130.2	9.8	6.7	12.7	52.8	8.6	8.9	8.4	106.0
127.8	7.6	5.2	9.9	52.5	7.6	7.7	7.6	101.3
129.8	5.5	3.8	7.1	53.5	6.4	6.6	6.3	104.8
134.1	4.1	3.1	5.0	62.0	5.0	5.1	4.9	104.1
136.8	2.9	2.2	3.5	62.9	3.9	4.0	3.9	102.6
145.6	2.4	1.8	2.9	62.1	3.2	3.3	3.1	106.5
146.8	2.0	1.5	2.5	60.0	2.3	2.3	2.3	100.0

えることはない。

4. 「呼吸器系の結核」死亡率性比は、全期間を通じて「全結核」死亡率性比と同傾向を示す。これは「呼吸器系の結核」が「全結核」中に占める比が大であるによる。また「呼吸器系の結核」死亡率性比は、「全結核」死亡率性比より常に高い。これは終始低い「腸および腹膜の結核」死亡率性比が、「全結核」死亡率性比を引下げるのによるものとおもわれる。

総括

明治32年より昭和30年にいたる57年間の「全結核」および各「臓器別結核」の死亡率と死亡率性比について観察した結果を総括すると、つぎのとおりである。

I. 性別「全結核」死亡率および死亡率性比死亡率は男女ともに明治42年に第1峯、大正7年に第2峯、昭和18年に第3峯をつくる。男子は第3峯が最高を示し、女子は第2峯が最高を示す。明治年代より昭和6年までは女子死亡率が男子死亡率より高く、昭和7年以降は男子死亡率が女子死亡率より高い。戦後は男女ともに急下降するが、特に女子死亡率下降が著明である。

性比は明治年代より昭和6年までは100以下で経過し、昭和7年にはじめて100をこえ、以後死亡率の昇降にかかわらず上昇する。特に戦後は女子死亡率の激減により性比は上昇する。

II. 性別「臓器別結核」死亡率および死亡率性比

1. 性別「呼吸器系の結核」死亡率および死亡率性比死亡率は男女ともに明治38年に第1峯、明治42年に第2峯、大正7年に第3峯、昭和18年に第4峯をつくるが、男子は第4峯が最高を示し、女子は第3峯が最高を示す。明治年代より大正9年までは女子死亡率が男子死亡率より高く、大正10年以降は男子死亡率が女子死亡率よりも高い。戦後は男女ともに急下降し、特に女子死亡率下降が著明である。

性比は明治年代より大正9年まで100以下で経過し、大正10年に100を越え、以後は死亡率昇降にかかわらず昭和22年まで上昇し、それより同26年まで一時停滞するが、同27年以降は再び上昇しつづける。

2. 性別「腸および腹膜の結核」死亡率および死亡率性比

死亡率は終始女子が男子より高い。男女ともに明治38年に第1峯、大正7年に第2峯、昭和13年に第3峯をつくり、男女ともに第2峯が最高を示す。しかして第3峯が「全結核」および「呼吸器系の結核」のそれより5年前に移動し、昭和14年より下降しはじめ下降速度は急である。

性比は終始低く、50~60代で経過し、昇降も少ない。

3. 性別「中枢神経系の結核」死亡率および死亡率性比

死亡率は男女ともに明治42年に第1峯、大正7年に第

2峯、昭和14年に第3峯をつくり、男子は第3峯が最高を示し、女子は第2峯が最高を示すが、昇降はいずれも緩徐である。しかして第3峯が「全結核」および「呼吸器系の結核」のそれより4年前に移動し、昭和15年より下降しはじめ下降速度は急である。

性比は明治より大正年代は100の線に固定し、以後昭和16年まで上昇し、戦後は下降して100に戻る。

III. 「全結核」および各「臓器別結核」死亡率性比の相互比較

1. 明治年代より昭和15年までは「中枢神経系の結核」死亡率性比が最も高く、ついで「呼吸器系の結核」、 「全結核」、 「腸および腹膜の結核」の順位で、昭和16年以降は「呼吸器系の結核」死亡率性比が最も高く、ついで「全結核」、 「中枢神経系の結核」、 「腸および腹膜の結核」の順位になる。

2. 各死亡率性比ともに昭和15年までは平行して昇降するが、以後は「全結核」および「呼吸器系の結核」死亡率性比は上昇し、「中枢神経系の結核」死亡率性比は昭和16年より下降し、「腸および腹膜の結核」死亡率性比は昭和17年より下降する。

3. 各死亡率性比がはじめて100以上になる時期は、「中枢神経系の結核」は大正8年で最も早く、ついで「呼吸器系の結核」は大正10年で、「全結核」はおくれて昭和7年であるが、「腸および腹膜の結核」は終始低く100を越えることはない。

4. 「呼吸器系の結核」死亡率性比は、全期間を通じて「全結核」死亡率性比と同傾向を示し、全結核死亡率性比より常に高い。

稿を終るに臨み、恩師吉岡博人教授および諸岡妙子助教の御懇篤な御指導御校閲に感謝します。

参考文献

- 1) 岩崎辻男：労科研 6 12 (1928), 労科研 8 854 (1931)
- 2) 永井潜：民族衛生 1 164~170 (1931)
- 3) 勝木新次：労科研 8 658~748 (1931)
- 4) 川人定男：国民衛生 9 1039~1060 (1932)
- 5) 立川清：厚生科学 1 221 (1940)
- 6) 丸岡秀夫：医学研究 22 419 (1952)
- 7) 諸岡妙子：東女医大誌 24 81~88 (昭29)
- 8) 諸岡妙子, 壺君代：東女医大誌 25 119~133 (昭30)
- 9) 伊藤章：生物誌 4 63~78 (昭31)
- 10) 吉岡博人：日臨結核 4 218~224 (昭18)
- 11) 吉岡博人：綜医学 8 657~662 (昭26)
- 12) 吉岡博人：日医事新報 1489号 24~27 (昭27)
- 13) 吉岡博人他：日医事新報 1667号 22~27 (昭31)
- 14) 諸岡妙子, 藤屋スエ：東女医大誌 29 180~201 (昭34)